

よい授業とは何か

浅野幸治

もし私の授業が学生にとっておもしろいとしたら、それは私という人間がおもしろいからではなくて、学習する内容つまり学問がおもしろいからであろう。確かに授業アンケートで「先生が見ていておもしろい」と書くような学生もいるが、それは授業に対する賛辞ではないだろう。授業は、私の故におもしろいのではなくて、学問そのものの面白さによっておもしろくあるべきなのである。そのような考えから、私は自分が学生と学問の間の障碍にならないような授業、いわば黒子に徹するような授業を心がけている。

では、教師の役割とは何か。私の考えでは、教師の役割としては、主に2つのことがある。第1に、勉強の案内人として、学生に基本的な情報を提供することである。例えば、学問の情勢や歴史的事実や文献案内などである。第2の役割は、理論や概念を説明することにある。ここに、よい授業とよくない授業の分かれ目があり、よい授業を特徴付けるものは、説明の分かり易さである。分かり易い説明とは、学問そのものを正確に学生に伝えているのであり、他方説明が分かりにくいとしたら、それは学生に学問を伝えることに失敗しているのである。

それでは、分かり易い説明をするためには、何が必要か。教師自身がよく勉強して自分の学力を高めることが、必要であり、重要である。ここで、学力ということには、3つのことが含まれる。第1には、言うまでもなく、自分の専門分野についての深く正確な理解である。第2には、専門外の広い学識や教養である。これがあれば、説明に応用がきき、分かり易い説明になるし、もしこれがなければ、学問が方向性を失って、学生にとっても学習していることの意味が不分明になる。第3に、考えを的確に表現する日本語力である。的確な表現は、学生の理解を助けるし、反対に日本語が下手であれば、説明がピンとこないものになるからである。

(付記 この小文は、豊田工業大学『TTI FD Newsletter』第1号(2005年9月)、4頁で発表したものである。)